

氏名	湯澤美麻		
学位の種類	博士（芸術学）		
学位記番号	博甲第 7833 号		
学位授与年月	平成 28 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	カスパー・ダーヴィト・フリードリヒの作品における地平線・ 水平線及び視点の設定 ―空をモチーフとした絵画表現の分析及び制作実践―		
主査	筑波大学教授	博士（芸術学）	内藤定壽
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	齊藤泰嘉
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	仏山輝美
副査	宇都宮大学准教授	博士（芸術学）	株田昌彦

論文の内容の要旨

（目的）

本研究の目的は、ドイツの画家カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ（Casper David Friedrich 1774-1840 年）の絵画作品について、空を描いた風景画の構図に着目し、特に地平線と水平線、対象を見る視点の設定という側面から考察したものである。

カスパー・ダーヴィト・フリードリヒはドイツロマン主義を代表する画家である。フリードリヒの風景画は、他の同時代の風景画やロマン主義に分類される作品とは一線を画すものであり、自然の風景、廃墟や墓地、古代の巨石などが、崇高で深い精神性と静寂感とともに描き出されている。

このような世界を表現できた理由について、湯澤氏は自らが制作研究に携わる立場を生かし、同じモチーフであっても、見る角度や構図の設定により大きく印象が異なるという経験から、フリードリヒの風景画の地平線と水平線、対象を見る視点の設定に理由があることを見出し、研究課題とした。

この研究は、フリードリヒの構図における地平線と水平線、対象を見る視点の設定方法とその効果を明らかにし、さらに自らの作品に導入し、作品制作の新たな展開を図ることを目的としたものである。

（対象と方法）

カスパー・ダーヴィト・フリードリヒの風景画の特徴を明らかにする上で、様々な観点からのアプローチの方法が考えられるが、本研究では構図の取り方から分析する方法を選択した。これは、湯澤氏が絵画の制作研究に携わっており、その研究成果を活かす方法を選択したことによる。

研究の対象としたものは、構図を設定する際の空と大地のあり方であり、地平線や水平線を画面のどの位置に設定するか、同時に風景をどのくらいの高さから見るか、すなわち視点をどのようなところに設定するかに着目

した。その特徴を明らかにするために、第一部第一章では、フリードリヒの風景画における地平線、水平線の位置、視点の設定位置について分析結果をまとめ、そのうえで同第二章において、同時代の17世紀オランダ風景画との比較考察を行い、また同じロマン主義に分類される風景画家の作品との比較考察を行った。同第三章では第一章第二章の分析結果を基に比較考察を行い、地平線、水平線の特徴についてまとめ、同第四章では視点の設定位置の違いによる表現効果の違いについて考察している。

第二部は、フリードリヒの研究の展開に伴う湯澤氏自身の作品の変化の分析であり、本研究の絵画制作における具体的な成果の分析、実証である。

(結果)

フリードリヒの風景画は、写実的ではあるものの、そこには現実を超えた崇高で深い精神性と静寂感が備わっている。一般的に風景画の構図を設定する際には、自分の好きな風景を探し歩いたり、最初に抽象的な画面構成を組み立てそこにモチーフを当てはめてゆく方法があるが、このような手法ではフリードリヒのような精神性の深い世界は表現できない。湯澤氏はこの研究を通して、フリードリヒの制作方法がそれらとは異なることを明らかにした。

具体的には、フリードリヒの風景画と17世紀オランダ風景画や19世紀ロマン主義の風景画と比較考察から、フリードリヒが徹底して不要なモチーフを排除し、無駄な要素をなくし、構図を単純化し、一つ一つのモチーフに意味を込めて構築してゆくという特徴的な手法を用いていることを明らかにした。また、水平線が高くかつ強調して描かれている作品の存在を指摘し、それが静寂で厳格な印象を作品に与えることに寄与している点を指摘にした。また山岳風景においては、上空から見たような視点の設定が確認され、それが作品に浮遊感や宇宙を感じさせるような空の神秘性を与えていることを指摘にした。すなわち、地平線、水平線、独特の視点の設定が、フリードリヒの風景画の崇高で深い精神性と静寂感に寄与していることを明らかにした。

現代の画家はカメラなどの映像機器を使用し、豊富な映像データを入手し、時には合成することも行う。その恩恵は大きく、湯澤氏も最近までそのような手法を選択し、風景画の制作を行ってきたと述べている。湯澤氏は、フリードリヒの制作手法を導入し、それが制作における新たな展開をもたらすことを明らかにした。

(考察)

自らの絵画作品にフリードリヒの構図設定の方法を導入することにより、制作における新たな展開があることが確認されたが、現代の美術界において確固たる存在感を示す絵画作品に昇華させることが、今後の研究である。

審査の結果の要旨

(批評)

現代におけるカメラなどの映像機器を用いた情報は、絵画制作において非常に有用であり、多くの画家が利用する。豊富な写真の中から、造形的な美しさという観点から選択され、時には合成され、絵画の素材として用いられる例が多い。この方法は現代美術の表現の一つであり、否定するものではない。ただ、それがすべてではなく、この方法の絵画表現全体の中での位置づけを理解しないまま制作を続けることは、表現の拡大や深まりを阻害し、表現の限界につながる。湯澤氏の研究はそのような姿勢に警鐘を鳴らすものである。

美しい風景写真は我々に感動を与えてくれる。しかし作家が自然を見て感じたことは、その場所の写真を提供

することでは十分に伝わらない場合が多い。湯澤氏の研究は、現代の最新の映像技術を用いる表現の盲点を浮き彫りにしたと同時に、それらを用いながらも、自分が感じた感動を絵画として表現するためにはどのような手法が有効か、という現代画家が直面する問題に一つの解答を示したものであり、高く評価できる。

平成 28 年 1 月 14 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。